琉球大学学術リポジトリ

自閉症児のコミュニケーション指導に関する研究

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 神園幸郎 公開日: 2009-03-06 キーワード (Ja): 自閉症, 愛着, コミュニケーション, 情動, 対人関係, 鏡像反応 キーワード (En): autistic children, communication, emotion, interpersonal relatedness, mirror response 作成者: 神園, 幸郎, Kamizono, Sachiro メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/9107

＜ 研 究 2 ＞

筑波大学附属図書館

自閉症児における愛着の形成過程

― 母親以外の特定の他者との関係において ―

神　園　幸　郎

The Developmental Process of Attachment in Children with Autistic Disorder

— In the Relationship with a Specific Other —

Sachiro KAMIZONO

琉球大学教育学部障害児教育実践センター紀要
第 2 号
The Research and Clinical Center for Handicapped Children
Faculty of Education, University of the Ryukyus
No. 2
Mar. 2000

琉球大学教育学部障害児教育実践センター紀要

琉球大学教育学部障害児教育実践センター紀要
No.2, 1-16, 2000.

自閉症児における愛着の形成過程

― 母親以外の特定の他者との関係において ―

神 園 幸 郎

The Developmental Process of Attachment in Children with Autistic Disorder

— In the Relationship with a Specific Other —

Sachiro KAMIZONO*

This study examined the developmental process of attachment to a specific other in children with autistic disorder. In the present case study, subject was 4-years children with autistic disorder. From 4 years 2 monthes to 5years 3 months, VTR records in the play situation,were examined. Results were as follows; (1) the developmental process of attachment to a specific other was fundamentally similar to one of normal children. But attachment was sensitive to attitudes of a specific other. (2) In order to promote attachment, it was effective to tumble on a trampoline with a specific other. (3) The development process of attachment was correlated to other domain such as symbolic function. (4) According to the change of attachment, verbal expressions to a specific other were changed. By establishment of attachment, his verbal expression reached at a level of expression to his mother. (5) Using a mirror, communication in play situation was activated. A mirror may be effevtive as a vehicle of self-expression in children with autistic disorder.

Key words: autism, mother-infant relationship, attachment, development

問 題

近年、自閉症研究は「カナーへの回帰」(野村、1992) という言葉に象徴されるように、これまで主流を占めてきた言語・認知障害説 (Rutter & Bartak, 1969; Rutter, 1978) に変わり、かつてのKanner (1943)の主張と同様に社会性障害を一次障害とみる研究が再び大きな流れを形成しつつある。自閉症の社会性障害を包括的に説明する枠組みとして最近注目されている「心の理論」に纏わる研究は、その先導的な研究領域となっている。Baron-Cohen, Leslie & Frith (1985)の「心の理論」欠如仮説によれば、自閉症児は他者の行動の背景にある心の状態を理解できないために、他者の行動を予測することができず、結果的に他者との対人関係を形成することが困難になるとしている。

「心の理論」派が主張するように自閉症児は確かに他者の心の理解に困難を持っていることは疑いはない。しかしながら、彼らの臨床像を縦断的に俯瞰すると、その問題性は決して不変的・固定

*Faculty of Education, Univ. of the Ryukyus

的に存在し続けるものではなく、他者との関係のあり様によって、あるいは発達によって力動的な変化の過程を辿ることがわかる。さらに、一概に他者の心の理解と言っても、子どもが他者の心の存在に気づき、その内容を理解するようになる過程は単純ではない。麻生(1980)は他者理解を「情動反応としての他者理解」、「振る舞いとしての他者理解」、「感情移入による他者理解」、そして「概念的他者理解」の４つの水準を設けて発達的に記述している。このように他者理解を一面的に捉えるのではなく、多面的・重層的に捉えることによって、発達の様々な局面でその時々の他者理解のあり様を想定できる。自閉症児における他者の心の理解についても、こうした観点での検討が必要であると思われる。自閉症児の他者理解を他者との関係のあり様に基づいて発達的に検討することによって、自閉症の中核症状である社会性障害の本質を解明できる公算が強い。

ところで、自閉症児における社会性障害の本質を探る糸口として、最も身近な他者である養育者に対する愛着の形成過程は注目されるところである。自閉症児は養育者に対して愛着を示すのだろうか。従来の研究結果によれば、自閉症児は見知らぬ他者（stranger）よりも養育者に接近-探索行動を示し、このことは精神年齢が等しい知的障害児や健常児と同じであった。さらに、愛着行動の成立は象徴機能やコミュニケーション機能の発達とは連関することが指摘されている(山上、1999, Sigman, & Ungerer, 1984; Shapiro, Sherman, Calamari, & Koch, 1987; Caps, Sigman, & Mundy, 1994; Roger, Ozonoff, Maslin-Cole, 1991, 1993)。これらの結果は自閉症児も養育者に対して愛着を形成することができることを示している。

しかし、こうした事実とは裏腹に自閉症児の親達は我が子が示す愛着の様相が健常児のそれとは明らかに異なっているとの感触を表明しており、研究結果に違和を唱えている（Volkmar, Cohen, & Paul, 1986)。このズレは上述した研究を含めて自閉症児の愛着研究の多くが愛着対象への物理的接近の量を尺度とするストレンジ・シチュエーション法に基づいているために生じていると思われる。別府（1994）が指摘するように、自閉症児の愛着を問題にする際には愛着の量的側面よりも、むしろ何を求めて他者に接近するのかといったやりとりの質的側面において検討する必要がある。

また、自閉症児の愛着の成り立ちを質的に捉えようとするとき、子どもの行動もさることながら、子どもと関わる側の養育者が果たす役割は極めて大きい。鯨岡(1993)が指摘するように、子どもの行動に対する養育者の間主観的感じ取りは養育者の子どもへの関わり方を規定する。そして、養育者の関わり方は子どもの愛着の成り立ちに影響を持つようになることは容易に理解できる。その際、養育者の間主観的感じ取りはその時々の母親の主観に支配されるているという。このことを敷衍して考えれば、養育者の子ども観や発達観さらには障害観などの主観性は間主観的感じ取りを規定し、引いては子どもの愛着の形成に重大な影響を及ぼすであろうことが予想される。

神園（1999）は自閉症児の愛着形成と母親の意識変革との関係を検討し、次のような知見を得た。すなわち、母親の意識の変革は子どもの間主観的把握に影響し、結果として子どもが示す愛着の質に顕著な影響を及ぼした。自閉症児の発達に及ぼす母親の意識変革の影響は極めて大きいといえる。このことは母親に対する自閉症児の愛着の形成は関係力動論的に把握する必要があることを示唆している。

自閉症状の改善方法として関係力動論的な視点を積極的に採用している研究に小林（1996）の研究がある。小林（1996）は自閉症を関係の障害と捉え、自閉症状を改善するためには、母親指導を中心とする治療的介入によって母子関係を調整することが重要であることを指摘した。このように母子関係に限定した愛着関係の形成を自閉症治療の目的とする小林（1995; 1996）の考えに対して、別府(1994)は次のように述べている。すなわち、自閉症児における社会性障害を改善するためには、自閉症児の他者認識の質的な変容を図る必要があるが、それは養育者との愛着関係を改善するだけでは充分ではなく、母親以外の複数の他者との愛着関係を形成することが重要であるというのである。

一般に、自閉症児においては養育者との愛着関係のもとで獲得された豊かな表現活動が、それ以

外の社会的なコミュニケーション場面ではほとんど見られないといった現象がある。このように、自閉症児における社会性の問題は養育者との間に形成された二者関係が他者一般に対して波及していかないところにある（山上、1999；岡田、1992)。このことは養育者との愛着関係が、養育者を心的世界を有する他者として認識した上で構築された二者関係とは異なっていることを物語っている。母子関係と母親以外の他者関係とを連続するものであるとみなすかどうかについては議論のあるところであるが、心的世界を有する存在としての他者理解を促し、自閉症児の社会性障害を改善に導くためには母子関係を調整するだけでは充分であるとは言い難い。別府(1994)が指摘するように、母親以外の複数の特定の他者との愛着関係を形成することが必要であると思われる。

そこで本研究では、まず第一に母親以外の特定の他者への愛着の形成を前方視的に追跡し、愛着の変容過程を明らかにする。別府(1994)は無発語の自閉症幼児を対象として、その対象を取り巻く複数の大人の中で特定の相手の形成がどのようになされ、その特定の相手とどのような関係を持つかについて検討した。その結果、密着的接近を求める関係、不安・不快を快に転換するために求める関係、心的支えを求める関係の３つの愛着関係の水準が見出された。この研究における特定の他者は、対象児の日常生活の中で自然発生的に形成されてきた愛着対象であった。本研究では自閉症児と関わる特定の相手を予め決めておき、その相手との愛着の形成過程を半統制的場面で観察した。そうすることによって、両者のやりとりの様相と愛着の質の変容過程との関連性をより明示的に捉えることができるのではないかと考えた。

第二に、愛着関係の形成とそれ以外の発達領域との関連性について検討する。先にも指摘したように、自閉症児における愛着関係の成立は象徴機能などの他の発達領域の機能を充実させることが明らかになっている（Sigman & Ungerer, 1984; 山上, 1999)。健常児においては、養育者と子どもの間主観的関係から愛着関係が形成され、そしてその愛着関係を基軸として認識や意味世界が形作られるという発達過程を辿る。他者と情緒的接触による間主観的関係を形成することが困難な自閉症児において、愛着関係の成立が他の発達領域の機能を充実させるという事実はどのように理解すべきであろうか。この点について、愛着関係の形成とその他の発達領域との関連性を縦断的に追跡することによって検討する。

第三は、対人関係に特殊化された自閉症児の表現活動を他者に解放するための有効な手段の開発についてである。自閉症児においても愛着関係が成立するとその二者関係においては比較的豊かなコミュニケーション活動が展開される。ところが二者間で獲得された表現方法やコミュニケーションの枠組みが当該二者関係に閉じているために、他の社会的場面では殆ど適用されず、社会性障害として顕現化する。この関係特殊的な自閉症児の自己表現活動を複数の他者に開くための方法について、ある試みを行ってその有効性を検討する。

方　法

１．対象児

本児は1993年生まれの男児である。父35歳、母31歳のとき、第一子として、帝王切開により出生する。妊娠２カ月と４カ月に切迫流産の徴候があったが、持ち直した。定頚３カ月、始歩12カ月で運動発達上の問題はなかった。１歳の誕生日の頃はワンワンなどいくつかの言葉が出ていた。１歳３カ月時には目が合わなくなり、爪先で歩くなど特異な行動が出現しはじめた。１歳６カ月健診で発達上の遅れが指摘され、１歳８カ月時に児童相談所にて自閉性障害と診断される。この頃は母親以外の他者を寄せ付けず、他者が近づくと声を出して威嚇したり、部屋のドアを閉めたりした。２歳を過ぎる頃になると、数字や文字に関心を示し、２歳２カ月で簡単な文章が読めるようになった。アルファベットもすぐに憶えた。２歳６カ月頃になると消失していた単語（りんご、みかんなど）が出はじめた。３歳を過ぎると語彙数が増加し、母親に対しては一語発話によって要求を伝達できるようになった。３歳３カ月時に保育所に入所し、障害児保育の該当児として処遇された。

数字や文字へのこだわりは依然として強く、カレンダーや文字ブロックなどでのひとり遊びが多

く、それゆえ他児との関わりはほとんどなかった。トイレの水への恐怖反応が強く、その恐怖は自分の排泄物にも拡大したため、排泄の自立は3歳6カ月までずれ込んだ。保育所生活が2年目の夏、本児が4歳6カ月時に本研究の対象児として筆者のもとへ通いはじめた。K式発達検査における本児の発達指数は68であった。

2．手続き

対象児と母親は1～2週間に1回の割で筆者が所属する大学に通ってきた。セッションに入る前に約10分程度の茶話会を持ち、落ちついたところでプレイルームに移動した。まず、母親と本児の自由遊びが行われた。その様子は同室するＶＴＲ撮影者によって約30分にわたって収録された。次に母親と特定の他者Ｔ（４年次の女子学生）が入れ替わり、本児とＴの自由遊び場面が同様に収録された。収録されたＶＴＲ資料はトランスクリプトされ、分析の資料として利用された。

収録期間はTが卒業するまでの８カ月間であった。この間に夏休みと冬休みの期間を除いて、19回のセッションを収録した。Ｔが卒業した後、特定の他者を女性の大学院生Ｎに代えてセッションを継続し、本児が小学校に入学する直前まで続けられた。

3．分析方法

本研究では本児とＴの自由遊びのセッションの19回だけを分析対象とした。なお、本児と母親のセッションについては今回は分析を行わなかった。分析はＴと撮影者それに筆者の３名によって行われた。本児とＴの自由遊び場面を、遊びの全体的特徴、本児のＴへの愛着行動、そして本児の行動特徴などの視点で３名の分析者がそれぞれ独自に分析した。そして、それぞれの分析結果を持ち寄り、３名の合議のもとで分析結果を集約して当該セッションの記録とした。本研究はこの記録資料に基づいて行われた。

結果と考察

Ⅰ　特定の他者への愛着の形成過程

本児とＴとの遊びを中心とする活動を通して形成された愛着関係の形成過程を，両者の関係の質を中心に検討し，表１に示したような結果を得た。本児の母子分離不安を背景とする両者の関係からＴを心理的安全基地とみなした関係の成立までの愛着の形成過程を以下に記述する。

1．　母親からの分離不安

母子自由遊びのセッションが終わり、母親が遊戯室から出て行くと本児は不安そうに母親を眺め、母親の姿が見えなくなるまで見送っていた。母親に変わって入室した他者Ｔが遊びに誘うものの、本児はＴが差し出す遊具には目もくれず母親が出ていったドアの方を見ていた。Ｔが母親の待機している場所を示し「お母さんは、向こうのお部屋でお勉強している」などと本児を安心させると、本児は「お母さんは、お勉強している」「お母さんは３階にいる」（実際は本児がいるプレイルームと母親の待機場所は同じ階の２階にある・・数字へのこだわり）などと何度も繰り返し発話した。これらのことばはＴに向けられているというよりも、むしろ自分を安心させるための独り言としての役割が強かった。したがって、この時点ではＴとのやりとりはほとんど成立していなかった。

ところで、この時期、本児は自宅から外出するときには常に肌身離さずある絵本（赤ずきんちゃん）を持っていないと落ちつかない状態であった。たまたま、祖母を空港で迎えるために車で外出した時に、慌てて外出したために本児は当該の絵本を持ってこなかったことに気づきパニックを起こしたというエピソードがあるほど、絵本に対する強迫的な固執行動が見られていた。それゆえ、筆者のもとを訪れる際にも本児はいつも絵本を携行して来ていた。そして、セッションの間中その絵本を手から話さなかった。床にあるボールを取るときにも、上手くボールを掴めず難渋するが、片手に持った絵本を離そうとはしなかった。

本児に見られるようなモノへの愛着は健常児にも見られる。健常児の発達途上で一過性に出現するこの現象は移行対象（transitional object）と呼ばれ、母親への繋がりを象徴している。したがって、やわらかくて、感触のよいモノが愛着の対象となる。一方、自閉症児が愛着を示す対象は金属のミニカーや雑誌など固くてごつごつした感触のモノが多い。そのため、自閉症児に見られるモノへの愛着を健常児の移行対象と同様な機能をもつ行動として考えることには異論があり、現在のと

表１　愛着の形成過程と他領域の発達

セッション	愛着の形成過程	遊びの変化	要求行動・固執行動	言　　葉
第1回	母子分離不安 ・母親の所在確認 ・「移行対象」の出現 （ボール、ダンゴ、ブロック）	やりとりの不成立 ひとり遊び ・ペグさし，型板はめ トランポリン遊びの登場 ・快の情動共有体験	要求行動なし 色の固執 ・黄色，ピンク 志向性の不明瞭な要求行動 ・要求物に手を置く ・足を踏みならす 文字・数字・順序への固執	コミュニケーション成立せず ・同語反復 （母親の所在の言及） Tの問いかけへの頷き ・やりとりは成立せず
第3回	母子分離不安の軽減 ・やりとりは成立せず ・母親の言及の消失 ・「移行対象」の消失	・モノ遊び，ひとり遊びの減少 ・身体運動遊び		
第5回	愛着行動の出現 ・模倣の出現 ・ギビング行動 ・Tの意図を尊重 ・Tとの空間を確保	豊富な身体接触経験 本児主導による遊びの出現 「ごっこ遊び」の出現 ・「コピー遊び」 ・動作的表象としてのふり	直接的な要求行動 ・指さし ・言葉	一語発話によるやりとり
第8回	愛着の成立（心理的安全基地） ・不安な事態に果敢に挑戦 ・不快な場面でTの援助を求める	象徴遊びの充実 やりとり自体を楽しむ ・からかい行動	要求行動の多様化 ・相手の情動に訴える要求（強い口調，甘え声の要求） ・母親への要求行動と差異なし 固執の消失	多語発話によるやりとり ・状況や文脈の説明 ・比較的長い発話長 ・母親と同等なやりとり水準

ころ明確な見解が示されているわけではない。しかしながら、上述した本児の行動は、Tへの愛着の形成過程に呼応して消失していった経緯から推すと、いわゆる移行対象としての機能を色濃く反映したものであると考えられる。すなわち、本児に見られたモノへの愛着は母親への繋がりを象徴した行動であり、なおかつ母子分離不安の強さを象徴している行動であると解釈できる。

さて、本児の母子分離不安はセッションを重ねるにつれて、次第に減少した。Tが差し出す遊具を手にするものの、それらを積極的に操作することがなかった本児はセッションを重ねるにつれて次第に自分の好きな遊具で遊びはじめた。それらの遊びは大小のペグが順序よく並んだモンテッソリ教具や型板はめなど、形や大きさなどを対応づけるようなあそびが専らであるため、Tとのやり

とりは成立せず、ひとり遊びに終始した。しかしながら、こうした遊びに集中するようになると、母親の所在を確認するような発話は次第に減少するようになった。このことと呼応するように、ペグさしや型板はめで手間取っているときなどにＴが言葉で教えてあげたり、手を添えて手伝ってあげると素直に従った。このようにＴと一緒に遊びを完成するといった経験を通してＴとのやりとりが芽生えはじめた。

この時点でも絵本の携行は依然として続いていた。ある時、絵本を忘れてきたことに気づいた本児は大学への道すがら車の中でナプキンに文字様の線を書きそれを絵本に代用して携行してきていた。それ程までに強固なこだわりを示していた本児も、遊戯室では絵本に変わって特定のボール（いつも黄色いボール）を肌身離さず持って遊んだり、ボールが積み木のブロックに変わったりとその対象が変化しはじめた。対象がブロックから木製のミニチュアの「だんご」に変わってしばらくすると「だんご」に対する本児の対応が質的に大きく変化した。これまではいわゆる移行対象としての機能、つまり母子分離による不安を和らげ、癒す機能を果たしていた「だんご」が、Ｔとのやりとりが活発になるとともに、遊びの中で本来の「だんご」として位置づけられるようになった。「だんご」を一時も手放さず、ペグさしや型板はめ遊びをしていた本児が、Ｔとのやりとりの中で「だんご」をダンゴとして見立てて、それを食べるふりをして遊ぶようになったのである。つまり、移行対象としての機能が薄れ、そのもの本来の機能が前景に出て、遊びの対象となったのである。

母子分離不安に基づく母親への言及はセッションを重ねるにつれて漸次減少し、第４セッションに１回認められた後は、その後のセッションでは完全に消失した。また、移行対象としてのモノが遊びの対象となりはじめたのも第４セッション以降であった。母親への言及が消失する時期と移行対象としてのモノの消失時期がほぼ一致するのは、２つの現象が母子分離不安という同一の原因に根ざしていたことを物語っている。また、第４セッション開始前に母親が室外に出て、代わりにＴが入室すると本児自ら母親にバイバイと手を振りドアを閉めて、さらに鍵までかけててしまった。このことも本児の気持ちがＴとの遊びに向けられ、その結果母子分離に伴う不安が軽減していることを示唆している。

こうした本児の分離不安の解消には、Ｔの関わりが大きな要因として作用していた。Ｔは本児の遊びを全面的に受容して寄り添う態度を明確に表明していた。このＴの姿勢は本児に快の情動を芽生えさせ、Ｔへの志向性を動機づけた。結果として、Ｔの働きかけに本児が応答するという原初的な形態のやりとりが芽生えた。このことが本児の分離不安を軽減させたのであろう。

しかし、本児の分離不安を一気に解消に導いた最大の要因は、身体運動を伴うダイナミックな遊びによる強烈な快の情動共有体験であった。それは次に示したトランポリン遊びをはじめとするダイナミックな身体運動遊びとそれに随伴する身体接触からもたらされた。

２．ダイナミックな遊びによる関係の接近

本児とＴの関わりはＴからの働きかけに本児が応じるという一方向的なものであったため、Ｔの関与がないと本児はすぐにひとり遊びに没入した。さらに、本児とＴとの関わりも次第に固定化しはじめて、広がりが失われた。こうしてペグさしや型板はめなどの遊具を介したやりとりがパタン化し停滞し始めた頃に、本児の要求に応じて始めたトランポリン遊びは本児とＴの関係に予期せぬ展開をもたらした。

遊戯室の壁側に折り畳んで置いたあったトランポリンに本児が手をかけているのを見たＴが「トランポリン、する？」と問うと、こっくりと頷いた。トランポリンを組み立てると本児はすぐに飛び乗り、楽しそうな笑顔を浮かべて跳びはねた。しかし、しばらくするとトランポリンの上に座り込み、つまらなそうな表情をした。そこで、Ｔがトランポリンで飛び跳ねると本児も同調して跳びはじめ、楽しそうに笑い声を出しながら跳ぶうちに次第に気分が高揚していくようであった。このトランポリンでのＴとの快の情動の共有体験を契機に本児とＴの関係は急速に接近し、両者の新たな関係の展開が見られるようになった。

トランポリンの上で本児とＴが一緒に跳ぶことで、姿勢の安定を保つために両者の身体は期せずして接触することになった。こうして自然に生じ

た身体接触は本児とTとの距離を縮める働きをする。その結果、トランポリン遊びの後ではモノを介した遊びは影をひそめ、専ら身体と身体を突き合わせたダイナミックな遊びが次々と展開されるようになった。例えば、トランポリンの周りで追いかけごっこをしたり、床に倒れたTの上に乗りかかってふざけたりといったモノを介さない遊びが繰り広げられた。

トランポリン遊びをはじめとして身体を介した遊びが活発に展開されるようになると、もはや本児から母親に言及することばは完全に消失し、Tへの接近行動が顕著に認められるようになってきた。こうした現象はなぜ生じるのであろうか。先に指摘したように、本児とTの関係の質的転換はトランポリン遊びにおける快の情動共有体験を契機として起きたと考えると、快の情動共有体験はどのような機序で両者の関係の変化をもたらすのであろうか。

トランポリン遊びは身体の浮遊感などの自己受容感覚や外界の見えの変化などの感覚と運動の協応を楽しむものである。一般に自閉症児においては、自己受容感覚と運動の随伴性は固執行動を生み出しやすい特質をもっている。したがって、ひとり遊びとしてのトランポリン遊びは自己に閉じた感覚に焦点化しやすく、固執行動に変質していく可能性を秘めている。しかしながら、本児のトランポリン遊びは自己に閉じた感覚の享受よりもTとの共同あそびにその本質があった。つまり、本児はTと一緒に跳ぶことが楽しいと感じているようであった。本児のトランポリン遊びは自己受容感覚や見えの変化と身体運動との随伴性に加えて、Tと一緒に跳ぶことによって、新たに発生してくる快が存在するということである。はたしてそれは何なのだろうか。

一つはトランポリン上における跳躍の同期性・同調性による快である。トランポリンで二人が跳ぶ場合、その動きを相手と同期させることができなければならない。相手のリズムに同調させなければならないので、ひとりで跳ぶ時に比べて制約条件が加わることになる。しかし、一旦同調して跳べるようになると、身体の動きやそれに伴う自己受容感覚や見えの変化も大きくなり、その分、楽しさも増幅される。

二つ目は身体接触による快である。トランポリン上では立位を保持することが不安定になるため、安定を確保するためにお互いが他者の身体を支えにせざるを得なくなり、結果として身体接触が生じる。一般に自閉症児の多くは他者から身体を触られることに抵抗を示すことが多い。トランポリン遊びに随伴する身体接触は、そのうち身体接触それ自体が快の情動を生み出すようになった。

三つ目は一体感から醸成される快である。本児とTが向かい合って、手を握りながら同期して跳んでいる場合、本児からTは背景の揺れから図化されて静止して見えるに違いない。こうした視覚的経験からくる一体感や同型的な身体の姿勢を共有することから生じる一体感などが融合して特有の快を生成した。

身体運動による緊張解消と、Tと一緒に跳ぶことによって新たに生じる快の情動が相俟って、本児とTとの心理的距離が接近し、Tに対する本児の愛着の形成が一気に促されたのであろう。本児の母子分離不安を払拭し、Tとの愛着関係を形成させる上でトランポリン遊びは極めて効果的であった。

3．Tへの愛着行動

身体を使ったダイナミックな遊びを通して本児はTに対して愛着行動を示すようになった。愛着に裏打ちされた本児の特徴的な行動のいくつかを以下に示した。

1）模倣の出現

Tが両手でフラフープを頭上にかざして手を放し、「すぽーん」と言いながらフープを頭上から足下に落として身体をくぐらせる仕草をした。それを見ていた本児はすぐにこの動作を模倣した。最初のうちはフープが頭に引っかかり失敗するが、何度も繰り返すうちに上手にできるようになった。また、Tがトランポリンを組み立てているところを見た本児は、すぐにその手順を模倣してTのお手伝いができた。

従来から自閉症児の中核的な症状の一つとして模倣の障害が指摘されているが、本児のように明確に模倣が出現する事例もあることから、模倣の障害は自閉症における本態性の障害ではなく発達的な特徴を持つ現象として見る必要がある。

模倣の出現の背景には自己の身体図式の形成や

感覚運動的知能の発達など認知的機能の充実が必要であることは論を待たないが、それらにも増してモデルとの同型性を確保しようとする主体の側の意欲の存在が不可欠である。本児は母親との関係ではかなり以前から母親の動作の模倣が出現していた。したがって、模倣をするための基本的な認知機能はかなり以前から充実していたといえる。しかしながら、Ｔとの関係の中ではすぐには模倣の出現を見ることはできなかった。模倣が見られるようになったのは、本児の側にＴへの愛着が形成されるようになってからであった。このことは模倣の出現にとって認知機能の充実に加えて、まさに愛着対象の形成が重要な働きをすることを物語っている。自閉症児にとって愛着対象出現と模倣の出現は極めて緊密な関係があるといえるであろう。

このことはまた、愛着対象との間で形成された模倣の生成の枠組みが、他者関係においては適用されにくいという自閉症特有の問題をも表している。ある特定の愛着関係で形成されたコミュニケーションの形式がその関係だけに閉じていて、それ以外の他者関係に一般化されにくいという自閉症児の特質については後でも指摘する。

２）ギビング行動

本児が鏡を見ながら木製玩具の「だんご」を食べるふりをしている。Ｔはそれを見て「おいしそう」と声をかけると本児は自分が持っているものと同じ「だんご」を遊具棚から探してＴにわたした。「だんご」をもらったＴは嬉しそうに「ありがとう」というと、本児は照れたように微笑した。

セッションが始まる前に毎回、母子と関係者を交えて簡単な茶話会を持っていた。その場で、クッキーを食べている本児に対してＴが「おいしそう、ほしいなー」と言うと残り少ないクッキーをＴにあげた。母親によれば、これまで本児は大好物のお菓子を他者にあげたことは一度もなかったそうである。その証拠にＶＴＲ撮影者のＮが同様にクッキーをねだると、完全に無視した。大喜びしているＴを見て本児は照れくさそうに微笑んでいた。

これらのエピソードは、本児が他者の嬉しさという内的状態を感知して、それに同化することで情動を共有しているということを示唆している。

３）意図のズレ

本児の要求に応じてＴが棚から大型のブロック（一辺が約20㎝）を取り出して一個づつ本児に手渡すと、本児はそれらを床に並べた。数個並べた後で本児が「運転手は・・」と言った。本児はこれらのブロックでバスを作ろうとしていたのである。Ｔは本児の意図に気づかず、次から次にブロックを本児に手渡すため、それらを並べているうちに本児のイメージしているバスの長さになったためか、手渡されたブロックを持ち思案している。しかし、Ｔが次から次に渡してくるために、仕方なくそれらを並べているうちに「こっちが、こっちが運転手」と言い一方の端を手で叩き、「こっち運転手だから、太郎（仮名）こっちのる」と言いながらその後ろを叩く。この時点でＴは本児の意図を理解して、ブロックを手渡すことを止めた。

このエピソードは本児とＴの意図がズレた時に本児がＴの要求を不本意ながら受け入れていることを表している。つまり、本児は自己の意図を抑制してまでもＴに接近しようとしているのである。さらに、本児は自己の意図を間接的な表現（「ブロックいらない」と言うのではなく、今はバスを作っていることをＴに知ってもらい、その上でブロックが多すぎることに気づいて欲しい）によって伝えている。こうしたことも本児のＴへの接近意図を表している。但し、この時点で見られたＴとの関わりやＴへの表現の形態はあくまでもＴへの愛着の形成途上に見られたものである。一定の愛着が形成された後は様相が異なり、本児の自己主張が前面に現れ、直接的な意図や要求の表現形態が多くなった。

４）二人だけの空間の確保

第４セッションになると本児は自己とＴとの遊び空間を確保するために、他者が遊戯室に入室できないようにドアに鍵をかけることをはじめた。母親とのセッションが終わり、母親と入れ替わりにＴが入室した途端に「お母さん、バイバイ」と言ってドアを閉め施錠する。また、セッション途中で筆者が入室すると、大声を上げて笑顔で走り回っていた本児が突然動きが止まり、無表情になる。そして筆者が室外に出るとすぐに施錠した。

また、セッションが終わって、母親が迎えに来

ても「まだ、遊ぶ」といってTのそばを離れないことが多くなった。そして、第5回以降では母子遊びのセッションになると本児は「お母さんとは遊ばない、先生（Tの呼び名）と遊ぶ」と言って、母親との遊びに関心を示さなくなった。母親によれば、セッション前日になると「あした、琉大いく」「先生と遊ぶ」と言い、セッションが楽しみで仕方がないといった様子を示すということであった。

上述したセッション中に示す本児の行動は、Tとの遊びが本児に無類の快の情動をもたらしており、この快の状態を他者に邪魔されずに確保しておきたいという本児の強い意図の表れと見ることができる。これらのことはTに対する本児の心理的接近の衝動がいかに強いものであるかを物語っている。

4．愛着関係の成立

Bowlby（1982）は愛着対象に向けられた行動を乳児期前半の声かけから物理的接近行動さらには愛着対象を安全基地と見なした行動まで12種類に分けて記述している。その中で自己の生活世界を拡大し自我の形成や認知-社会的発達を遂げていく上で、重要な核になるのが心理的安全基地として機能する愛着対象の存在である。したがって、心理的安全基地として機能する対象関係の形成は愛着関係の基本的な枠組みの成立を意味するものと考えてよいであろう。

本児はTに対して様々なタイプの接近行動を示し、本児にとってTは次第に愛着対象として確固とした存在を占めるようになってきた。そして、第5セッションを迎える頃になると、愛着の成立をうかがわせる現象が出現してきた。

本児は運動がぎこちなく、とりわけ協応運動が必要となる事態ではその特徴が顕著になった。乗り物の玩具に人形を乗せて走り回って遊ぶことはあっても、自らがそれに乗って遊ぶことは極端に嫌がっていた。それゆえ、三輪車に乗ってペダルを漕ぐこともできなかった。ところが、Tへの愛着行動が強くなった第5セッションにおいて次のような行動が出現した。本児は手押し車（子どもが乗れるスペースがある）に片足をのせ、今にも乗ろうとするが、足を引っ込めてしまう。明らかに葛藤している様子が見て取れる。次に本児はTの手を取り自分の片足を荷車の荷台にのせて、「先生が乗る」という。表2はその時の本児とTのやりとりである。本児は乗り物に乗りたいという欲求とひとりで乗ることによる不安との葛藤状態を克服するために、愛着対象と一緒に乗ることによって生じる安心感に依存したと推察できる。つまり、本児はTを心理的な安全基地として不安をもたらす事態に果敢に挑戦し、葛藤を克服して新たな経験世界を獲得できたことになる。

表2　不安への挑戦

本　　児	T
荷車に足をのせるが，すぐに引っ込めて，思案している。	
Tの手を掴み，「先生も乗る」と言う。	
	「え？乗るの？ちょっと待ってよ」「先生が乗るの？」
荷台に足を置き，「先生が乗る」と言う。	
	「いいよ」と言い，荷台に乗る。
Tが乗るのを見ている。	
	荷台に乗り，「きゃー」と歓声。
Tが荷台に乗った瞬間，本児も乗る。	

また、不快な事態に立ち至ったときにも本児はTを求める行動を示した。遊戯室の黒板のチョーク受けにクレヨンが置いてあったため、本児が誤ってそのクレヨンを使って黒板に絵を書きはじめたので、筆者が注意した。すると本児は叱られたと思ったようで、やり場のない表情をしたあと、少し離れたところにいたTにすがるような目線を向けた。Tはそれに気づいて、本児に近寄り慰めると本児は安心したような表情に戻り、Tに笑顔を返した。このエピソードも本児がTを心理的な安全基地として表象していることを物語っている。

以上の事実から、本児はこの時点でTを心理的安全基地とする対象関係を形成できており、したがって本児とTとの間には愛着の基本的枠組みが

成立しているとみなしてよいであろう。

Ⅱ　愛着の形成過程と他の発達領域との関係

山上（1999）は、愛着関係の成立と象徴機能の獲得の関連について次のように説明している。すなわち、愛着対象を停泊点とすることで外界が新たな知覚や覚醒をもたらすため、探索活動が活性化する。そして、愛着対象の動作模倣は共同注視行動の仲立ちによってやがて身振り動作となって指示機能を獲得しはじめると、Piagetの感覚運動的知能の時期の最終段階において象徴機能が獲得されると言うのである。このように、自閉症児の発達にとって養育者や特定の他者への愛着の形成が認知発達のような他領域の機能の発達に重要な役割を果たしていることが従来から指摘されている。そこで、本研究においても特定の他者Ｔとの愛着の形成過程と他領域の発達との関連性について検討し、その結果を表１に示した。

愛着対象としてのＴが本児にとって心理的安全基地としての意味を持ちはじめるようになるまでの愛着の形成過程と遊びの変化の関連性について以下に記述する。なお、意図的・実験的な介入を試みた第９セッション以降の遊びの特徴については後述する。

１．愛着関係と遊び

本研究の開始当初の本児は母親からの分離に伴う不安が強く、遊びらしき行動はほとんど見られなかった。第２セッションになると、ペグさしや型板はめなどの玩具を使ったひとり遊びが出現した。本児の遊びを援助するようにＴがペグ棒や型板を差し出すと嫌がらずに受け取るようになった。その直後から、Ｔの問いかけに対して、頷きで応答するようになった。しかし、まだ共同遊びにはほど遠く、Ｔの働きかけがないと、すぐにひとり遊びに埋没してしまった。

前述したように、トランポリン遊びによって両者の愛着関係が一気に好転すると、多様な遊びが展開されるようになった。例えば、ブロックを使ったバス遊びなどでは、本児とＴが共同しながら遊びを完成することができるようになった。また、Ｔが発案した「輪くぐり遊び」など、本児が苦手とする全身の協応運動を要する遊びに対しても熱心に模倣をくり返し、新たな遊びのパタンを獲得できるようになった（第４回セッション）。

この頃まではまだ、Ｔとのセッションに移ってしばらくの時間は本児はペグさしや型はめなどのひとり遊びに向かっていた。Ｔがトランポリンや共同遊びに誘うと遊びがダイナミックに展開するようになるが、自ら積極的にＴに働きかけて遊びを展開することは少なかった。ところが、Ｔを心理的安全基地として関わるようになると、遊びの主導権が本児に移り、遊びは常に本児の能動的・主体的な活動から始まるようになる。したがって、Ｔはその遊びに追従して関わるかたちになった。また、第８セッションでは童話のストーリーをなぞってイメージによる遊びが出現したり、「お化け」や「悪魔」のふりをしてＴの反応を楽しんだりすることが見られるようになった。また、見立て遊びやごっこ遊びも複雑化してきた。例えば、輪投げの輪を床に置き、輪の中にペグの棒を立ててケーキに見立てた上で、それにおしっこをかけるふりをしてＴの反応を期待するといった行動が出てきた。本児のこの行動は、別府（1999）が「挑発行為」として取り上げた行動に類似しているが、「挑発行為」が他者を情動や意図を有する主体として理解できていない段階に出現するとされているのに対して、本児の行動は明らかにＴの情動や意図に働きかけた行動であることから「挑発行為」ではないと考えられる。本児の関心の対象は見立てそれ自体にあるのではなく、自己の行為に対するＴの内面の変化であった。Ｔが笑うと本児も微笑み、両者が情動を共有すると、それで満足したような表情をみせて、次の遊びに移るのであった。このようなやりとり自体を楽しむ遊びは水準の高い他者理解に支えられていることを物語っている。

２．愛着と要求行動

本児の内面を母子分離不安が支配している時期には、Ｔに対する要求行動は皆無であった。しかし、分離不安が多少和らぐと、無志向的で明瞭性の乏しい要求が出現してきた。

例えば、トランポリンに手をかけてそれを組み立てるように要求したり、Ｔに跳んで欲しいために足を踏みならしたりした。いずれもＴが推測を働かせてようやく要求の内容を把握できるような類の要求行動であった。

ところが、愛着関係が成立してTを心理的安全基地として関われるようになると、要求行動も以前のような無志向的で不明瞭な形態ではなく、直接的でなおかつ強力な要求行動に変貌した。そのため、本児とTの意図がズレた際には本児の要求は一段と激しくなった。

また、要求の仕方も多様化し、これまでは見られなかったようなTの情動に訴える要求行動が出現してきた。例えば、ある時は強い口調で要求したり、またある時は甘えたような口調で訴えかけたりといったように、母親への要求行動とほぼ類似した要求の形態がとられるようになった。このことも、本児とTの愛着関係のありようを色濃く反映していると言えよう。

3．愛着とこだわり行動

本児が示すこだわり行動もTとの愛着関係の形成とともに変化した。本児は色へのこだわりが強く、強迫的に同じ色へ固執した。ただ、ときどき固執する色が変わることがあったが、その時点では例外なく変化の契機となる随伴事象が存在していた。たとえば、黄色にこだわっていた本児は、運動会の練習で好きな女の子がピンク色の帽子を被っていると、自分も同じ色の帽子にこだわり、そのうちにこだわりの対象が黄色からピンク色のモノ全般に拡大するといったように、必ずと言っていい程、変化の契機が存在した。また、数字に対するこだわりも強く、遊びの最中に数字が出現する事態になると、遊びの文脈から逸れて、数字へのこだわりに入り込んでしまうことがあった。例えば、買い物遊びの中でスーパーのエレベーターを想像した時点で「次は5階です。次は8階です。次は・・・」などから数字の呼称へと入り込み、やりとりが中断することが度々みられた。

こうした、こだわり行動もTとの愛着が形成されるにつれて次第に頻度が低くなり、Tが心理的安全基地として機能しはじめてしばらくするとほとんど消失した。頑強に残っていたモノを並べる行為へのこだわりも次のような経緯を経て消失した。本児は輪投げの輪を床に一列に並べることにこだわっていた。それ故、並べてある輪をTがずらしたり、取り上げたりすると強硬に抵抗した。ところが、両足を輪の中に入れて「ペンギン歩き」の遊びをTと共に楽しむうちに次第に並べることに対するこだわりが薄れ、輪の列を変えることに対する抵抗が弱くなった。そして、並べ変えた輪を利用してTが「ケンケンパ」遊びを教えると、本児は次第に興が乗ってきて大喜びしながらその「ケンケンパ」遊びをTと楽しんだ。その後は、輪投げの輪だけでなくそれ以外のモノでも、並べることに固執することがなくなった。

以上のことから、モノへのこだわり行動や固執行動の消失は特定の他者との愛着の形成と関連を持つことが想定される。こだわり行動は不安や不快に陥ったときに特に頻繁に出現することから、固執行動がもたらす快の情動が直面する不安や不快を払拭する働きを持つのではないかとの予想が成り立つ。仮にそうだとすると、愛着の形成に伴ってこだわりや固執が消失するのは、愛着対象との快の情動の共有体験が固執行動がもたらす快の情動を凌駕しはじめたからであると考えることができる。自閉症児の行動が快楽原理に大きく支配されていることを考えれば、こうした解釈は妥当性を持つのではないだろうか。

Ⅲ　愛着の成立を基盤とする自己表現の促進を意図した介入

前節で述べたようにTが心理的安全基地として機能しはじめると、遊びの形態や内容が大きく変容し、要求行動も直接的でしかもその形態は多様性を帯びるようになった。同様に本児の言語表現もTへの愛着の形成に伴って、明らかな変化を示した。初期のセッションでは同語反復やエコラリアが専らで、言語的なコミュニケーションはほとんど成立していなかった。しかし、セッションを重ねるに連れて、Tの問いかけに対して一語発話で応答するようになった。そして、Tへの愛着が成立し、Tが心理的安全基地として機能しはじめると、イメージを共有する遊びが活発に展開されるようになった。イメージに基づくやりとり遊びにおいては、共有する場の状況や文脈を言語で表現しなければならない局面が多くなった。そのために、こうした遊びを展開することは必然的に言語表現を促すことになり、結果として本児の言語表現を一層豊かにすることになった。第8回のセッションになると本児の発話は多語発話による比較的に発話長の長いやりとりが続くようになった。

以上のように本児の言語表現はTへの愛着の形成過程を極めてよく反映して豊かさを増してきた。こうした現象は、自閉症児の言語表現は特定の他者との愛着に支えられていることを如実に物語っている。ただ、第8セッションにおける本児の言語表現は、Tとの遊び場面で同語反復やエコラリアだけが出現していた第1セッションと同じ時の母子交流遊びのセッションにおいて既に実現されていた。つまり、母子間で交わされる言語的コミュニケーションの水準に達するまでにTとの交流場面では8回のセッションを要したということになる。しかも、そのプロセスはまさに言語発達の段階をなぞるかのごとく、一語発話から2語発話そして母子間で交わされる比較的発話長の長いやりとりへと変化しているのである。

このことは、自閉症児の自己表現が特定の他者との間に閉じていて、その関係で獲得され成立した表現の枠組みが、一般の他者との関係では適用されないことを意味している。しかも、自己の言語能力水準に見合った言語表現が可能になるまでの変化の過程は、愛着の形成過程に随伴して一語発話から二語発話そして多語発話というように、現在の自己の言語水準に達するまでに辿った言語発達の過程を辿り直していると言えよう。

こうした自閉症児の特性は山上（1999）も指摘しており、「愛着対象との関係を支えとして獲得された情意的、認知的な力は愛着対象から離れて多の社会的なコミュニケーション場面へと般化しにくい傾向がみられた」と述べている。同様に岡田（1992)は見知らぬ他者や子ども同士の交流場面では、愛着対象との間で獲得しているコミュニケーションの力を発揮できない状態に戻ってしまう傾向が見られると述べている。愛着対象との特定の関係に閉じた自閉症児の表現活動やコミュニケーション行動を複数の他者に解放し、一般化するための指導法の開発が望まれるところである。

本研究では愛着対象としてのTへの愛着の成立を基盤として、本児に自己表現を促す試みを行った。以下に示す2つの方法を考案し、それらを組み合わせて本児との遊び場面に導入した。

1.「家」の導入

言語による表現活動を促し、かつ相互のコミュニケーションを活性化させるために、本児とTの身体の物理的な分離を意図した「家」を遊び場面に導入した（図1）。本児用とT用に作った2軒のカラフルな段ボール製の屋根付き家は、本児の興味をそそり、目論見通りの反応を誘発した。本児はこれまでになく言語表現が豊か（長い発話やターンの増加）で、なおかつ明確にTへ伝えることを意識して場の状況や前後の文脈をも織り込んだ表現が見られるようになった（表3）。

ところが、「家」を使った遊びの回数が増えるにつれて表現活動やコミュニケーション行動が薄

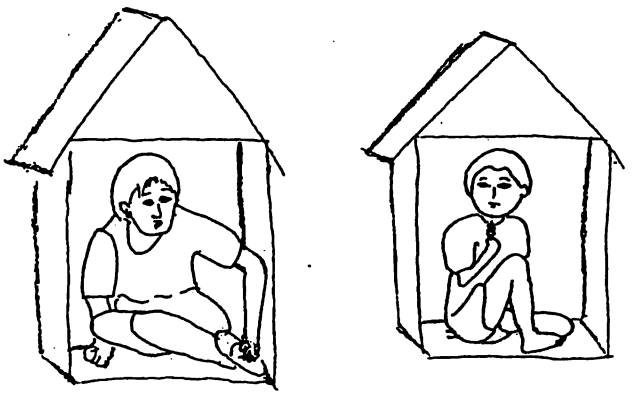

図1　「家」あそび

表3　会話によるターンの増加

本　　児	T
(家を指して) 「先生は太郎（仮名）のお家があるよ」	
	「じゃ，先生待っているよ」
「先生のお家は太郎が入っているから掃除している」	
	「うん，ありがとう，オキマート（スーパー），何があるの？」
「お菓子はないから掃除している」	
「ナイビタンも，お菓子，チョコレートもあるよ」	
	「ある？」

らいできた。本児は「家」の中に入ることが少なくなり、そのかわり離れて置かれてある自分の「家」とTの「家」をくっつけはじめたのである。Tの頑強な抵抗にも屈せず、ねばり強く試みるのであった。恐らく本児は「家」の中に入ることによって、Tと物理的に分離されることになり、そのことによって心理的安全基地としてのTの存在が揺らぎ、希薄になりつつあることに対して抵抗したのかもしれない。このように考えれば、愛着関係の危機は自己表現を抑圧し、コミュニケーション意欲を萎えさせるように作用したと言えるであろう。このことは一方では自閉症児の対人関係に対する過敏性を表す象徴的な現象であると言えるかもしれない。

2．　鏡の導入

本児は鏡に対する関心が高く、遊戯室の壁面にある大きな鏡（縦1m×横2m）に向かって様々な姿勢や動作を行っていた。特に自己の身体の動きと鏡映像との連動性に関心が高く、意識的に身体を動かして、その際の自己鏡映像を眺めるといった行動が頻繁に出現していた。そこで、本児のこうした鏡に対する反応性を言語表現を促すための手段として利用できるのではないかと考え、以下のような介入を行った。

先述したように「家」の導入によって本児とTは分離され、しかも相手を見ることができない状態におかれた。その結果、一時は本児の自己表現に促進的に作用していた分離状況は、セッションを重ねるに連れて変質し、本児に一種の分離不安の状態をもたらし、自己表現活動に対して抑制的に働きはじめた。そこで、鏡の1.5m前に家を置き、それぞれの家の開口部を鏡に向けた。そうすることによって、家の中からは相手を直接に見ることはできないが、鏡を利用すれば相手の姿を見ることができ視覚的な交流が可能になった。その結果、前述した「家」の導入当初と同様に、本児の言語表現は豊かになり、Tとの言語によるコミュニケーションも活発に展開するようになった。

また、以前には見られなかった興味深い現象も現れてきた。本児は鏡を介してTに話しかけるだけではなく、ときどき自己の鏡映像に向かって話しかけた上で、それに答えるといった、いわば「自問自答」をするようになった。しばらくすると、Tに向けた言葉でも、目は自己鏡映像を見ていると言うことがしばしば見られるようになった。これまで本児には次に示すような強迫的な行動特徴が存在していた。すなわち、本児はこれからしようとする自己の意図を独り言のように呟いた後でその行為を実行に移していた。たとえば、当日の日めくりカレンダーが切り取られていないのに気づくと、遠くの位置からでもカレンダーを指さしながら「破ろうか、そうだ破ろう、よし破ろう」と独り言を言いながらカレンダーに近づき、日付の紙を切り取った。このように自己の意図を行為に先立って独語として言語化することは以前でも見られていたが、鏡に対する「自問自答」は自己の意図だけに限らず、その時の感情までも言語化され自己鏡映像に向けられた。さらに、場合によっては鏡映像を外在する他者であるかのように叱りつけたり、けなしたりといった言語表現もなされるようになった（表4）。当然のこととして、言語表現は一層活発になりしかもその際に発せられる言葉は極めて充実した内容であった。さらに、もっと重要なことは「自問自答」の言葉からそのときどきの本児の内的状態が第3者に明瞭に伝わることであった。Tは本児の行動の背景に存在する意図、信念、や感情などの内的状態を的確に把握したうえで本児に関わることができるため、これまでにも増してやりとりが円滑に行われるようになった。

Lacan（1966）は自己の鏡映像を他者とみなす乳児期から自己の鏡映像を自己の虚像とみなし鏡映像理解が成立する幼児期までの間に「鏡像段階」呼ばれる移行時期が存在すると述べている。彼によれば、「鏡像段階」は自己の鏡映像を「奇妙な他者」もしくは「分身」とみなす時期であると言う。神園（1998）は自閉症児が鏡に対して示す反応を分析した結果、自閉症児の多くが発達的には「鏡像段階」にとどまっており、自己の鏡映像を「分身」とみなしているとことを指摘した。恐らく、本児に出現した「自問自答」などの鏡映像に対する反応は「鏡像段階」の特徴を反映しているのであろう。鏡を導入することで促進された本児の言語表現やコミュニケーションの活性化は、自己の鏡映像を「分身」とみなし、その「分身」に自己の意図や感情を投影するという本児の心的活

表4　鏡に向かった「自問自答」

本　　児	
（自己の鏡映像を見る）	「きれいに掃除？」
（鏡映像とにらめっこして，顔をしかめる）	
（両手を床について，鏡映像と対峙する）	
（鏡映像に向かって，恐い形相で）	「おまえは掃除している」という。

動によって生み出されてきた現象であると思われる。

自閉症児の言語表現を促進させ、コミュニケーションを活性化させる媒体として、鏡は有効であることがわかった。今後は無発語自閉症の事例なども対象としながら詳細な検討を行う必要があろう。

3．鏡を利用した「家」遊びの終結とその後のTとの関係

「家」と鏡によるコミュニケーションの促進を意図した介入は当初は予期した効果をもたらしたが、セッションを重ねるに連れて次第にその効果は薄れ、本児とTの関係に負の影響を与えはじめた。その要因のひとつは、先にも指摘したように「家」に入ることによって心理的安全基地としてのTと物理的に分断されることになり、そのことが本児に不安や不快をもたらしたことである。本児はTの「家」と自分の「家」を執拗に密着させたり、Tの「家」に一緒に入ったりしてTとの接触をことさら求めようとした。これらの現象は本児の心理状態を如実に物語っていると思われる。つまり、本児はTとの分離によって生じた不安やそれに伴う不快感を何とか解消しようとして、Tへの接近や身体接触を求めたのであろう。

二つ目は、遊びに電話を導入したことが本児にさらなる不快感をもたらしたことである。筆者は、言葉に依存せざるを得ない電話遊びにおいて鏡を視覚的媒体として利用することで、一層のコミュニケーションの活性化を促すことができるのではないかと考えて電話を使ったやりとり遊びを試みた。ところが実際には、筆者の目論見に反して全く逆の結果になってしまった。本児はTに促されて受話器をとった途端に、その内容が第3者には理解不能な、いわゆる「自問自答」のモノローグになってしまうのである。当然のこととして、Tとのやりとりはその時点で中断し、Tが盛んに話しかけても全く応答がなかった。本児のこの豹変ぶりは実に奇妙であった。母親によれば本児は自宅でも同様な行動を示すとのことであった。以前から、母親は本児の電話に対する不適切な対応を改善しようとして、親戚にお願いして本児にわざと電話してもらって電話のやりとりを指導していたそうである。ところが、最近では本児は電話に対して明白な拒否反応を示してきているとのことであった。本児の電話に対する心理的抵抗は第14セッションにおいて、受話器を取るように促すTに対して「電話、怖い」との本児の言葉となって表れた。恐らく、電話をとることが本児にとって一種の失敗経験をもたらし、それに伴う不快感が累積して恐怖感までも芽生えさせたのであろう。

三つ目は、電話事態と同様に自己の鏡映像に対する「自問自答」が本児にとって不快な情動をもたらしていることである。本児が自己の鏡映像に向けて話しかけているときの言語内容や表情は常に不快な情動を表していた。鏡像を攻撃したり、ののしったりする言葉が溢れ、表情は目をつり上げて怒ったように険しくなったり、舌出しや、しかめっ面になったりした。これらの本児の行動から鏡映像に対して「自問自答」している時の本児の内面は不快な情動の状態にあったことが推測できる。

以上のように、本児とTのコミュニケーションの活性化をねらって導入した「家」、鏡そして電話などが本児に不安や不快をもたらし、結果として両者の関係を稀薄化させる要因として作用した。こうした事実を考慮して、筆者は第9回のセッションから始めた意図的な介入を第15回のセッションで終結した。そして、第16回のセッションからは以前のように身体運動を中心とする遊びを復活させた。その結果、本児とTのやりとりは以前のような活気を取り戻し、本児のTに対する愛着は以前にも増して深化した。たとえば、次のような事実はそのことをよく表している。

本児は時々全体的な活動水準が低下することが

あった。その原因については、体調を崩した後であるとか仲良しの子が本児を敬遠するようになった時などに出現する傾向があることから、身体的状態や心理-社会的抑圧状態あるいはそれらの相乗的な作用によって起きる可能性が考えられるが、現在のところよくわからない。本児がそのような状態に陥ると、本セッションにおいても明白にその特徴が表れた。本児はいかにも身体がだるそうに床に座り込み、ほとんど動かず、表情も変化に乏しくなった。そして、Tの問いかけにもあまり応じなくなり、たまに応えるときはほとんど聞き取れないような小さな声で話した。まるで、一種の「うつ状態」のような様相を呈した。以前であれば、こうした状態の時は本児とTのやりとりはほとんど成立せず、したがって遊びは不活発でひとり遊びがほとんどであった。ところが、本児の活動水準が低下し、「うつ状態」が顕現化した第18回のセッションでは本児はこれまでとは異なった様相を呈した。活動水準が低下したときの常で、本児はひとり遊びに没入した。本児の状態を察知したTは身体を使ったダイナミックな遊びに本児を誘う。Tがフラフープを床に並べて、「ケンケンパ」といいながら跳んで見せると、床に座り込んで見ていた本児は関心を示して、Tの後について跳び、「ケンケンパ」遊びが始まる。最初はうまく跳べなかったが、Tに励まされて何度も挑戦するうちに次第に上手に跳べるなってくると、笑顔で大声を上げながら楽しそうに遊べるようになった。その後は本児の調子のいいときによく聞かれる鼻歌を歌うまでになった。恐らく、身体運動を伴うダイナミックな遊びが本児に充実感と開放感をもたらしたのであろう。本来的に調子の悪い本児が「うつ状態」を乗り越えてこのような状態に変貌できたのは、Tへの深い愛着とそれによる確固とした心理的支えがあったからであろう。

結　論

1．本児の愛着の形成過程は基本的には通常の変化の過程と大きな違いはなかった。しかしながら，本児とTの愛着関係は関わる側のTの姿勢に極めて敏感であった。Tが常に本児の意図に添って受容的に関わり，快の情動共有体験を確保できていなければ，その関係はすぐに停滞した。
2．本児とTとの愛着関係を形成するうえで，トランポリンなどのダイナミックな身体運動を伴う遊びが効果的であった。
3．愛着関係の成立は象徴機能の充実や要求行動の多様性など他領域の発達と密接に関係していることが明らかになった。
4．Tとの間で交わされる本児の言語表現は，愛着関係の変化に随伴して，現在の本児の言語水準に達するまでに辿った言語発達の過程を辿りなおした。
5．遊びへの鏡の導入は本児の活動を活性化した。自己の鏡映像に対して「自問自答」したり，あるいは恐い形相で怒ったり，けなしたりなどの行動が現れ，その際の本児の内的状態が第3者にも的確に伝わった。鏡は自閉症児の自己表現を促進させ，コミュニケーションを活性化させる媒体として有効であることがわかった。

謝　辞

本研究の実施にあたり，ご協力頂きました本児とその保護者に厚く御礼を申し上げます。本児の健やかな成長を祈りつつ，ここに記して感謝の意を表します。

参考文献

1）麻生　武（1992）．　身ぶりからことばへ －赤ちゃんにみる私たちの起源－　新曜社．
2）Baron-Cohen S., Leslie A.M., & Frith U. (1985). Does the autistis child have a "theory of mind"? Cognition, 21, 37-46.
3）別府 哲（1994）　話し言葉をもたない自閉性障害幼児における特定の相手の形成，教育心理学研究，42, 156-166.
4）別府（1999）　挑発行為を頻発した自閉症幼児における他者理解の障害と発達　発達心理学研究　10, 88-98.
5）Bowlby（1982）　Attachment and loss: Vol. 1. Attachment. London, Hogarth Press.（黒田実郎・大羽　蓁・岡田洋子・

黒田聖一（訳）(1991)　母子関係の理論　I　愛着行動　岩崎学術出版社.

6）Capps, L., Sigman, M., & Mundy, P. (1994). Attachment security in children with autism. Development and psychopathology, 6, 249-261.

7）神園幸郎　(1999)　自閉症児の発達に及ぼす母親の意識改革の影響，琉球大学教育学部障害児教育実践センター紀要，1, 1-16.

8）Kanner, L. (1943). Autistic Disturbances of affective contact. Nervous Child, 2, 217-250.

9）小林隆児 (1995)　自閉症児の発達精神病理と治療　ー生涯発達の視点からー　児童青年精神医学とその近接領域，37, 25-31.

10）小林隆児 (1996).　自閉症児の情動的コミュニケーションに対する治療的介入　ー関係性の障害の視点からー，児童青年精神医学とその近接領域，37 (4), 319-330.

11）鯨岡　峻 (1993)．セルフ・レギュレーションの萌芽　現代のエスプリ　No.314　自己モニタリング（心・状況の変化を読み取る）丸野俊一（編）　25-36.

12）Lacan (1966)（宮本忠雄　訳：＜わたし＞の機能を形成するものとしての鏡像段階　ー精神分析の経験が我々に示すもの　エクリ I　弘文堂　1972）

13）野村東助(1992).　自閉症児における社会的障害　野村東助・伊藤英夫・伊藤良子（編）自閉症児の言語指導（pp.1-18）学苑社

14）岡田眞子　(1992)　幼児期における自閉症状形成過程の検討，国際社会・福祉センター紀要，8, 39-64

15）Rogers, S., Ozonoff, S., & Maslin-Cole, C. (1991). A comparative study of attachment behavior in young children with autism or other psychiatric disorders. Journal of Child and Adolescent Psychiatry, 3, 1274-1282.

16）Rogers, S., Ozonoff, S., & Maslin-Cole, C. (1993). Developmental aspects of attachment behavior in young children with pervasive developmental disorders. Journal of the American Academy of Child and Adolescent Psychiatry, 30, 483-488.

17）Rutter, M. & Bartak, L. (1969). Causes of infantile autism: Some consideration from recent research. Journal of Autism and Childfood Schizophrenia, 1;20.

18）Rutter, M. (1978). Language disorder and infantile autism. In M. Rutter & E. Schopler (Eds.), Autism; A reappraisal of concepts and treatment (pp. 85-104). New York:Plenum Press.

19）Shapiro, T, Sherman, M., Calamari, G., & Koch, D. (1987). Attachment in autism and other developmental disorders. Journal of Child and Adolescent Psychiatry, 226, 485-590.

20）Sigman, M., & Ungerer, J. (1984). Attachment behavior in autistic children. Journal of Autism and Developmental Disorders, 14, 231-244

21）Volkmar, F. R. & Cohen, D. J. (1985). A first-person account of the experience of infantile autism by Tony W. Journal of Autism and Developmental Disorders, 15, 47-54.

22）山上雅子 (1999)　自閉症児の初期発達　ー発達臨床的理解と援助ー　ミネルヴァ書房　129-157.